



ゴッドファーザーを愛する理由

対談

ロバート・ハリス
(作家、ラジオ・ナビゲーター)

ピーター・バラカン
(ブロードキャスター)

血なまぐさい抗争を描くギャング映画が、公開五〇年を経て今なお、なぜこれほどまでに世界中の人々を魅了し続けるのか? 『ゴッドファーザー』マニアを自認するコスモポリタンと、公開時ロンドンで第一作を観たイギリス人が、シリーズ三作を振り返りながら、思いを巡らす。

ハリス 八年くらい前までは毎年、お正月に必ず『ゴッドファーザー』を観ていたんです。バラカン 『I(『ゴッドファーザー』)から『ゴッドファーザーPARTIII』までを全部?』
ハリス いや、『I』だけで、たまに『II』も両方とも五〇回は観ましたね。バラカン すごい。

ハリス 『ゴッドファーザー』だけは、僕もうるさいですから。バラカン そうか。僕なんか話にならない。『I』から『III』まで観てはいて、すごく好きな映画だけど、『I』はこれまでに二、三回観たくらいかなあ。封切り時はたぶんロンドンで観てると思う。すでにものすごく話題になってました。

ハリス 僕は日本を出て世界を放浪する直前に、新宿の大きい映画館で観たんです。まだ入れ替え制じゃなくて、すごく混んでた。最初のアメリカ人の妻と階段に座って観て、二人ともシヨ

ックを受けたというほど感動して立てなくなつて、上映終了後に出ていく人たちを塞いでしまつて迷惑をかけたのを覚えていません。

マーロン・ブランドの凄み

バラカン マーロン・ブランドの映画をリアルタイムで観たのは『ゴッドファーザー』か、ベルナルド・ベルトルッチ監督の『ラスト・タンゴ・イン・パリ』(一九七二)。ほぼ同時でどっちを先に観たかははっきり覚えてないんです。ハリス 同じ年ですよ。『ラスト・タンゴ』も好きで五回は観てますけど、プロットがはつきりしない変な映画で、最初はよくわからなかった。ブランドがマリア・シュナイダーを辱めるシーンが脚本になく、マリアの合意なく行われたということ、最近になって大問題になっています。映画そのものはブランドの演技を見ているだけでも面白かった。

バラカン 目が離せない映画でしたよね。その頃のマーロン・ブランドはもうかつてのスターという感じでしたけど、でも素晴らしいと思つた。『ゴッドファーザー』では頬の内側に綿を入れていたというのは本当? ハリス うん、それ本当。

バラカン ブランドは僕が生まれた頃に、エリア・カザン監督の『欲望という名の電車』(一九五二)とか『波止場』(一九五四)とかで有名だった。でも、五〇年代後半から六〇年代の代表作を挙げると言われたら、僕には挙げられない。十数年ぶりにいきなり『ゴッドファーザー』で現れたという、そんな感じじゃなかった? ハリス うん、そう。彼と仕事をするのは難しかったって聞きますね。セリフも覚えてこないし、ギャラは法外だし、『ゴッドファーザー』でアカデミー主演男優賞に選ばれても「ハリウッドにおけるインディアン(ネイティブ・アメリカン)など少数民族への差別に抗議する」と言つて受賞拒否したりと、ポリティカルな発言も多かった。あと、共演した女優に手を付ける。それはいけないことですね(笑)。

バラカン それはマーロン・ブランドかロバート・ハリスか、と(笑)。彼のヴィトールはあまり役だけど本人はイタリア系でも何でもなし、若いときは東洋人の役を演じたり、カッコいいけど少し変わった顔立ちですよ。ハリス ちょっと古代ローマ人の顔をしています。バラカン ああ、そうか。髪の毛も短く刈り上げてるし。

ハリス アメリカのPLAYBOY誌に載つて

たブランドのインタビューで、“Acting is easy.”と言いながら、「僕の右目を見てごらん」って言ふくだりがあるんです。インタビューが右目を見ると、涙が流れる。「今度は左目」って言うのと左目から流れる。セリフ覚えが悪かったから大根役者のように言う人もいるけど、すごい俳優だったんですよ。

無名監督と無名俳優のタッグ

ハリス マリオ・プーゾの原作は読んでました? バラカン 読んでない。映画を観ただけ。

ハリス 僕は読んでた。プーゾはナポリからの移民の家に生まれて、真面目な小説を書いてたんだけど売れなかった。その出版社からの依頼が来て、わずかな前払い金でイタリア系マフィアの小説を書くことになり、その企画をプーゾがパラマウント映画に売り込んだ。パラマウントは映画化権を買取り、経済的な援助をしながら書き上げさせたんだよね。一九六九年に出たベストセラーになっていたから読んだけど、正直いってそんなにクオリティの高い小説とは思わなかった。テーマもストーリーもあつちこつち飛んじゃうし。

バラカン パルプ・フィクションみたいな?